

ほほえみ 第39号



2月は節分・立春です。寒かった一月を振り返ると、それでも春に近づいているのだなあと思います。皆様、インフルエンザなどかからずにお過ごしでしょうか。例年、2月はインフルエンザの流行のピークですが、去年は、ワクチンの効きが悪かったのか珍しくインフルエンザにかかってしまいましたが、今年は大丈夫そうな雰囲気です。とはいえ、油断は禁物ですね。

STAP細胞

2014年1月30日号の『Nature』に、理化学研究所の小保方晴子さんが筆頭者の「Stimulus-triggered fate conversion of somatic cells into pluripotency」という科学論文が掲載され、ニュースとなっています。日本の理系女子の快挙ということもあり、常識を覆す大発見として大きく報道されていますね。



朝日新聞オンライン版 2014.1.30

山中伸弥教授がiPS細胞 (induced pluripotent stem cell) の報告をしたのは2006年、この時はマウスの線維芽細胞に遺伝子導入してiPS細胞を作ったのです。この発見もそれまでの生物学の常識を覆したものであったのですが、今回のSTAP細胞は、細胞外の環境を変えることで『多能性』を獲得しているのです、生物学的には、この事実の意味とはなにかが、今後問われていくことになるのでしょうか。

多能性を獲得することの意味が、なかなか伝わらないと思うので、別のたとえで言うと、細胞を酸性環境にただけで、細胞ががん化したとしたら、これは大変なことですね。でも実際は、中途半端ながん化ではなく、さらに進んだ多能性の獲得ということが起こる。体内にだって、酸性の環境は生じうるし、STAP細胞がiPS細胞のように、極めて実験的な条件のものではないとすると、STAP細胞の発見が、生物学的に意味することは何なのだろうかということです。

細胞の多能性と分化という秩序が根底から問い直されることになるのかもしれませんが。生命の最小単位は細胞であって、「全ての細胞は他の細胞に由来する」という、大病理学者ウィルヒョー(1821-1902)以来の細胞を基にした生命観は、細胞という基本単位(アトム)が、分化を行いながら秩序だったヒエラルキーを形成するという生物の基本原理に読み替えられました。しかし、細胞同士が条件によって多能性をもつということは、ラディカルな交換可能性を示唆しており、例えば、社会現象を細胞の世界のアナロジーとして見るような発想を覆すものかもしれません。ミツバチの世界で、働きバチが全て女王バチになれるというより劇的な変化ですね。



ルドルフ・ウィルヒョー (Wikipediaより引用)

分化ということをつえ直すことも必要かもしれません。ここで、ふと思うのは「分化する」ということと、名づけるということの関連です。アリストテレスのカテゴリーの考え方は、そのものらしさを説明する(述語づける)仕方によって、物事を分類することなのですが、ソシュール(Ferdinand de Saussure 1857-1913)の本を読むと、アリストテレス的なカテゴリー論とは全く異なる言葉の捉え方がなされていて「関係の世界において意味を持つものは差異だけである」、すなわち、言葉とは「・・・らしさ」を表現している訳ではなく、AとA'に差を認める故に言葉が生まれるといった、革新的なことが書いてありますね。

A'はAでない部分に意味があるという否定的な意味合いが本来の意味であるという発想です。こう考えてくると、我々は、細胞は分化しているように見えていたのですが、実際は対して多能性幹細胞と異ならないという印象です。

東北臨床腫瘍セミナー（2013年12月）

昨年12月7日に福島市で、第18回東北臨床腫瘍セミナーが開催されました。

1.希少がん、2.がんサバイバーシップ、3.切除不能大腸癌において期待される新規薬剤、4.がん医療と心のケアという多彩な内容のセミナーでした。がんサバイバーシップは、NPO法人HOPEプロジェクトの桜井なおみさんの講演でしたが、私が座長を行いました。桜井さんが行われているHOPEプロジェクトさんからは、東日本大震災の際に、化学療法中の方に特化した支援として、ウィッグや化粧品、乳がんの手術後の方用のアンダーウェアなど段ボール箱で20箱ぐらい支援物資を送っていただいたのですが、桜井さん自身が、がんサバイバーで、日本で最も活動的な女性のお一人です。大変、実体験に基づいた素晴らしい講演であったと思います。終了後も会場の方々から多数の質問を受けていただきました。全体に、多彩な内容ながら充実したセミナーであったと思います。

第19回は仙台市で7月5日に行われますが、第20回は11月に盛岡市（マリオス）で行うことが決定致しましたので、これまでに取り上げられた内容を吟味しながら、セミナー参加者の方々に来てよかったと思っていただけるような内容にしたいと頭を悩ませています。



コラッセふくしま

谷川俊太郎質問箱

「ほぼ日刊イトイ新聞」で連載された「谷川俊太郎質問箱」の内容が本になったものが、この本です。詩の言葉と哲学という関係を、ダンテを読んでからしばしば考えるようになりましたが、この本は、詩人が様々な人からの質問に答えるもので、詩とも哲学とも取れるような珠玉の言葉が並んでいますね。

実際に買って読んでいただいた方が良いのですが、「たわいのないおしゃべりができません」とか、「人を指さしてはいけない理由」とか、子供から大人まで、なるほど、何故なんだろうねと思わせる質問が64個並んでいて、その答えが正に絶妙なのです。本質でもあり、ユーモアでもあり、こういう答えが返せる人間はとしては、流石に谷川俊太郎氏の右に出るものはいないであろうと思います。

詩ではなく、哲学でもない。人間学そのものといった本ですね。ユーモアとは何か、聞かれたらこの本を示せば最もユーモアというものを伝えられるのではないのでしょうか。挿絵も楽しい。もちろん、詩も良いのですが、谷川さんの文章も良いですよ。お勧めです。



MEMO

2月のがん化学療法科の予定

2月3日	節分
2月11日	建国記念の日
2月14日	柴田教授外来
2月21日	新渡戸稲造記念メディカル・カフェ(予定)
2月28日	柴田教授外来

今年の恵方は『東北東』です

